慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	李商隠の「漫成」詩二組について
Sub Title	On Li Shang-yin's two series of poems entitled "Mangcheng"
Author	詹, 満江(Sen, Mitsue)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.43- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

李商隠の「漫成」詩二組について

詹　満　江

いわゆる〝論詩絶句〟は、杜甫が始めたといわれる。後世、金の元好問、清の王士禎らによって継承され、発展したことはよく知られている。ところで晩唐の李商隠にも、杜甫のそうした絶句に影響を受けたと思われる作がある。「漫成五章」と「漫成三首」である。いままで、〝論詩絶句〟全般に渡る論究はなされている[1]が、李商隠のこれらの詩については詳しく検討されていない。そこで小稿において、これらの詩について考えたことを述べてみたい。

(一)

李商隠の「漫成五章」及び「漫成三首」について、従来どのように言及されてきたか、杜甫の影響を指摘しているものを挙げよう。

「漫成五章」については、次の例がある。

古来論詩者。子美戯為六絶句。義山漫成五章。東坡次韻孔毅父五首。又読孟郊詩二首。遺山漢謡魏什云云三十首。又済南雑詩十首。議論闡発。皆有妙理。

昔からいままでに詩を論じたのは、杜子美の「戯れに六絶句を為る」、李義山の「漫成五章」、蘇東坡の「孔毅父に次韻す五首」、そして「孟郊の詩を読む二首」、元遺山の「漢謡魏什…三十首」、そして「済南雑詩十首」である。そ

れらの議論は、人の気付かぬところを明らかにし、いずれにもすぐれた道理がある。

田雯『古歓堂雑著』巻一「論詩」

杜子美有戯為六絶句。論文章之正変。義山仿之。

杜子美に「戯れに六絶句を為る」という作があり、文章の正風・変雅を論じている。李義山はそれにならったのである。

『重訂李義山詩箋注』巻中「漫成五章」程夢星按語

此五篇之線索。而義山一生喫緊之篇章也。其体格則全仿老杜。

この五篇の意味するところを探りもとめて、それらが李義山の一生における大事な篇章であるとわかった。それらの内容と詩体は、すべて杜甫にならっている。

『玉溪生詩詳註』巻二「漫成五章」馮浩按語

また、「漫成三首」については、次の例がある。

抑揚反覆。干少陵之戯為六絶句也。直神似之。豈止伯仲之間乎。

（これらの詩の）ほめたりけなしたりする調子の上げ下げは、杜少陵の「戯れに六絶句を為る」におけるのと、まっすぐな精神が似ている。どうして相匹敵するということだけに止まろうか。

『玉溪生詩箋』巻上「漫成三首」銭龍惕按語

此仿少陵戯為六絶句而作。

これは杜少陵の「戯れに六絶句を為る」にならって作ったのである。

朱鶴齢箋注沈厚塽輯評『李義山詩集』巻上「漫成三首」朱彝尊評

此種絶句倡自工部。

このたぐいの絶句は杜工部からうたい始められたのである。

同右紀昀評

清初の朱彝尊をはじめとして、いずれの例も清人のものであり、李商隠のころよりかなり時代が下るが、これは、李商隠の詩に注を施すことが本格化する時期と呼応している。例の中の程夢星・馮浩は注を作った人である。ところで、さらに下った光緒年間の人宗廷輔に『古今論詩絶句』[2]輯注があるが、それには李商隠の詩は採られていない。ではどんな詩が採られているか、目次によって列挙してみよう。

杜甫「戯為六絶」

戴復古「昭武太守王子文日与李賈厳羽共観前輩一両家詩及晩唐詩。因有論詩十絶。子文見之謂。無甚高論。亦可作詩家小学須知。」

元好問「論詩三十首」

「論詩三首」

「自題中州集後五首」

方孝孺「談詩五首」

李濂「絶句」（二首）（宗廷輔按語）「按詩似不止此二首。今嵩渚集未見。此従列朝詩伝録出。」

王士禎「戯倣元遺山論詩絶句三十六首」元缺一首附録王啟浣元注

厳虞惇「偶題四絶句」

袁枚「倣元遺山論詩絶句三十八首并序」遺山論詩古多今少。予古少今多。兼懐人故也。其所未見。与雖見而胸中無所軒輊者。倶付闕如。

洪亮吉「道中無事。偶作論詩絶句二十首」

張問陶「論詩十二絶句」

彭蘊章「題元人詩十二首」

蔣士銓「論詩雑詠二十首」

（「　」、句点及び（　）内は筆者による。）

以上、十二人の〝論詩絶句〟が採られている。李商隠の詩はなぜ採られていないのであろうか、との疑問がわくが、撰者宗廷輔の選定基準を推し測るに、

①詩形は七言絶句であること。

②内容は詩及び詩人についてであること。

③二首以上の連作であること。

の三つであるらしい。宗廷輔はとくに選定基準について述べていないが、採っている作について考えれば、この三つということになる。となれば、李商隠の「漫成五章」は②の基準を満たさないし、「漫成三首」は①の基準を満たさないの

で、選に漏れることになる。

では、李商隠のこれらの詩をどのように捉らえたらいいのか。作品に即して考えてみよう。

(二)

まず、「漫成五章」についてである。詩は全て『唐詩百名家全集』所収『李商隠詩集』三巻（清席啓寓輯　康熙四十一年序洞庭席氏刊本）による。

其一

沈宋裁詞矜変律　沈宋　詞を裁(つく)って　変律を矜り
王楊落筆得良朋　王楊　筆を落して　良朋を得
当時自謂宗師妙　当時　自ら謂(おも)う宗師の妙
今日惟観対属能　今日　惟だ観る対属の能

第一首は、沈佺期・宋之問、初唐の四傑について詠じている。「王楊」といえば、「王楊盧駱は当時の体」ではじまる杜甫の「戯れに六絶句を為る」第二首がすぐに思い浮かぶ。「沈宋」の方は、杜甫の「秋日夔府にて詠懐し、鄭監審李賓客之芳に寄せ奉る一百韻」詩に「陰何　尚お清省、沈宋　炊(たちま)ち聯翩」とあるが、李商隠が杜甫のこの詩を意識したかどうかはわからない。少なくとも、杜甫の「戯れに六絶句を為る」は、李商隠の念頭に置かれていたであろう。

李商隠はこの詩において、沈佺期・宋之問、王勃・楊炯は、当時、自分たちとしては、後世の詩人たちから宗師と仰がれるに足る功績を残したと思っていたのに、今日の詩人たちは、彼らの対句のうまさしか認めていない、と詠じてい

る。初唐の四傑の中の盧照隣・駱賓王は、どちらかといえば近体よりは古体に長ずる詩人たちなので、厳密にいって、対句すなわち近体の上手の対象からは外れるであろう。沈宋・王楊に対する後世の詩人たちの不当な評価を指摘しているという点で、李商隠の主旨は、杜甫が「戯れに六絶句を為る」の中で、初唐の四傑を正当に評価し、四傑を笑い、軽視する同時代の詩人たちを批判する姿勢と一致している。しかし、杜甫が「爾が曹　身と名と倶に滅するも、廃せず江河の万古に流るるを」と、同時代の詩人たちに積極的な攻撃のことばを浴びせるのに比べて、李商隠の詠みぶりは、やや虚無的で、皮肉っぽくさえあるように感じる。こうした傾向は、「漢宮詞」や「賈生」などの詠史詩にも見られ、李商隠の一つの特色といえよう。

諸評注の中で、姚培謙は杜詩との関わりについて次のように言う。

王楊沈宋。乃唐初応運而興者。豈料世無具眼。皮相至此。即少陵所謂軽薄為文哂未休也。

王楊・沈宋は唐初に天命に応じて活躍した人たちである。世の人々に見る目がなく、こんなにまで皮相とは思いもよらなかった。これはつまり、杜少陵のいうところの「軽薄　文を為り哂うて未だ休まず」である。

姚培謙箋注『李義山詩集』巻一六「漫成」

他に、程夢星・馮浩らは、李商隠が令狐楚から章奏の文すなわち駢儷文を手解きされたことと結びつけているが、これは附会していると思う。

其二

李杜操持事略斉　李杜　操持　事　略（ほぼ）　斉し

三才万象共端倪　三才　万象　共に端倪す

集仙殿与金鑾殿　集仙殿と金鑾殿と

可是蒼蠅惑曙雞　可って是　蒼蠅　曙雞を惑わす

第二首は李白・杜甫について詠じている。この二大詩人については、元稹の「唐検校工部員外郎杜君墓係銘并びに序」における議論、それを受けての韓愈の「張籍を調る」詩、また白居易の「元九に与うる書」における言及など、様々に取り上げられてきたこと周知のとおりである。(3) その優劣が論じられつつも、大方、李杜と並称されている。

李商隠は、この詩において、李杜の詩人としての偉大さを詠じながらも、政治的には不遇であったことをうたっている。「集仙殿」は開元十二年に集賢殿と改められたが、杜甫が玄宗に「三大礼賦」を献じ、集賢院待制を命ぜられたことによる。「金鑾殿」は李白が賀知章の推挙によって、玄宗に謁見したところ。「蒼蠅惑曙雞」は『詩経』斉風「雞鳴」に「雞　則ち鳴くに匪ず、蒼蠅の声なり」とあるのによる。あおばえの羽音が夜明けのにわとりの声と間違われるように、あおばえのような讒佞の臣によって、李白も杜甫も朝廷から遠ざけられたことを言っている。

諸評注のうち、何焯と程夢星は、李商隠自身の不遇を表わしているとみている。程夢星はこの詩について次のように言う。

第二章嘅遭讒謗不得立朝也。首句言李杜操持略同。猶己之道直而窮不求人知也。次句言李杜之才三才万象共一端倪。猶己之博学強記下筆不休也。三句言杜之待制集賢。李之召見金鑾。猶己之釈褐秘書也。四句言李遭力士之謗。杜遇林甫之忌。竟能蠱惑君心。阻其進用。是皆蒼蠅惑曙雞耳。猶己之遭讒佐幕。竟不得通籍於朝也。

第二首は、讒謗にあって朝廷に立てないことを嘆いている。起句に、李杜はその節操がほぼ同じであったというのは、李商隠自身の道がまっすぐで、窮しても人に知られることを求めなかったことのようである。承句に、李杜

の才は天地人のはたらきや万象をともにひたすら推し測ろうとしたというのは、李商隠自身の博学強記で、詩を作ってやめないことのようである。転句に、杜は集賢に待制し、李は金鑾に召見せられるというのは、李商隠自身が秘書省に出仕したことのようである。結句に、李は高力士に謗られ、杜は李林甫にきらわれ、とうとう君心をまどわすものに、用いられるのを邪魔されたことは、いずれもあおばえが夜明けのにわとりかと人をまどわすのにほかならないというのは、李商隠自身が粛言にあって節度使の幕僚となり、朝廷に仕官できなかったことのようである。

『重訂李義山詩箋注』巻中「漫成五章」

程夢星は、李商隠の詩の一句一句について、寄託するところを示しているが、これは穿鑿に過ぎるようである。何焯は次のように言う。

此嘆己之不遇時主如李杜也。

この詩は、李商隠自身が当時、君主に認められないことが、李杜のようであることを嘆いている。

『義門読書記』「李義山詩集」巻下

何焯の発言の方が穏当であろう。他に、朱彝尊に引かれる楊守智、そして馮浩は、やはり令狐楚の子令狐綯との関わりに結びつけているが、寄託するところをそこまで具体的にすべき論拠はない。

むしろ、李商隠が第二首において、文学における評価に加えて、政治の場での遇不遇をも詠じていることに注目したい。このあたりから、杜甫の「戯れに六絶句を為る」とは異なる方向を示してきているのである。

其三

生児古有孫征虜　児を生むに古(いにしえ)は孫征虜有り

嫁女今無王右軍　女を嫁すに今は王右軍無し
借問琴書終一世　借問す琴書に一世を終うるは
何如旗蓋仰三分　旗蓋　三分を仰ぐに何如ぞ

第三首においては、文武の優劣を問う。もう、詩人について、或いは文学についての議論ではなくなる。「孫征虜」とは三国呉の孫権のこと。『三国志』巻四十七呉書　孫権の伝の注に『呉歴』を引き、曹操が濡須を出て、油船を作り、夜中州に渡ったとき、孫権の水軍の整讒なのを見て、「子を生みては当に孫仲謀の如かるべし、劉景升の児子は豚犬の若き耳。」と言ったことによる。孫権は討虜将軍になったことがあるので「孫征虜」と言ったのであろう。「王右軍」とは東晋の王羲之のこと。『晋書』巻八十　王羲之の伝に、太尉の郗鑒が門生を遣わして王導のところへ婿を求めたところ、王氏の子弟はみなかしこまっていたが、ひとりだけ寝ころんでものを食べ、何も耳に入らないかのようにしているのがいたという。郗鑒は、それこそ良い婿ではないかと言って、訪ねたところ、それは王羲之だったので、彼を婿にしたという話が見える。

孫権は〝武〟の代表として、王羲之は〝文〟の代表として対峙している。「王右軍」というのは、対句にするためと、韻を踏むためであって、いまの場合〝武〟を意味しない。李商隠は、孫権や王羲之のような武勇や風流を誇るに足る人物は、いまや見出せないが、さて、王羲之のように弾琴読書して一生を終えるのと、孫権のように軍旗儀仗を立て、天を三分して仰ぐのとどちらが優るのか、と詠じている。「何如」という場合、このことばの後に来る事柄が優るのが通常であるから、李商隠は、孫権の方を支持していることになる。この〝文〟より〝武〟であるという、李商隠にとっては自己否定的な考えは、他の詩にも詠じられている。例えば「驕児詩」に、

耶昔好読書　耶は昔　読書を好み
懇苦自著述　懇苦して自ら著述する
憔悴欲四十　憔悴して四十にならんと欲し
無肉畏蚤虱　肉無くして蚤虱を畏る
児慎勿学耶　児よ慎しみて耶が
読書求甲乙　読書して甲乙を求むるを学ぶこと勿れ
穰苴司馬法　穰苴　司馬の法
張良黄石術　張良　黄石の術
便為帝王師　便ち帝王の師為り
不仮更繊悉　更に繊悉なるを仮らざるなり
況今西与北　況んや今　西と北とに
羌戎正狂悖　羌戎　正に狂悖するをや
誅赦両未成　誅赦　両つながら未だ成らず
将養如痼疾　将養して痼疾の如し
児当速成大　児よ当に速やかに成大して
探雛入虎窟　雛を探りて虎窟に入るべし
当為万戸侯　当に万戸の侯と為るべく

勿守一経帙　一経の帙を守ること勿れ

とうたわれ、李商隠はわが子に、父のように読書して科挙を受けたりせず、穰苴や張良のように兵術を修めて武将になれと言っている。また、「江亭に散席して、柳路を循り、吟じて官舎に帰る」詩に、

従詩得何報　詩従り何の報(むくい)をか得ん
唯感二毛催　唯だ感ず二毛の催すを

と、詩作に励んで得たものは白髪だけだと自嘲する。李商隠が本心から文学する自己を否定しているとは思えないが、これは各地の節度使の幕僚をして転々とする李商隠の悲しい現実認識であったにちがいない。

朱彝尊が引く楊守智、そして何焯、程夢星、馮浩は、李商隠が王茂元の娘と結婚して今狐楚の子令狐綯に憎まれたこととこの詩を結びつけるが、これも根拠があってのことではない。

其四

代北偏師銜使節　代北の偏師　使節を銜み
関東裨将建行台　関東の裨将　行台を建つ
不妨常日饒軽薄　妨げず　常日　軽薄を饒(ゆる)すを
且喜臨戎用草萊　且つ喜ぶ　戎(いくさ)に臨んで草萊を用うるを

第四首は全く文学と関係のない内容となっている。第三首に、〝文〟より〝武〟だと詠じていて、第四首において、はたして〝武〟をもっぱら詠じることになったようである。この詩の解釈については、諸評注さまざまであるが、大きくは三つに分けられよう。

第一は、王茂元とのことに結びつける解釈で、朱彝尊が引く楊守智、そして何焯、程夢星の考えである。

楊云。此言入河陽幕也。

楊（守智）がいうには、この詩は河陽（節度使王茂元）の幕に入ったことを言ったのである。

朱鶴齢箋注沈厚塽輯評『李義山詩集』巻中朱彝尊引楊守智

第四首前二句専指茂元。後二句言辟為掌書記也。

第四首の前二句は、もっぱら王茂元を指し、後二句は（李商隠が）召し出されて掌書記となったことを言っている。

同右何焯評

第四章嘅従事於軍戎也。唐書会昌三年。成徳軍節度使王元逵為北面招討沢潞使。魏博節度使何弘敬為東面招討沢潞使。及王茂元劉沔。討劉稹。首句言王元逵何弘敬為招討也。次句言劉沔為振武牙将。今為河東節度使。共討劉稹也。三四句言平時武臣不重文士。当此。軍書旁午。磨盾書檄。尚仮手於翩翩之書記。為可喜也。時義山在茂元軍中嘗有代茂元檄劉稹文。義山既為茂元愛壻。則軽薄之語断不指茂元。或当時軍中有軽薄義山者。故云然耳。

第四首は、軍隊に仕えることを嘆いている。『唐書』に、会昌三年、成徳軍節度使王元逵は北面招討沢潞使となり、魏博節度使何弘敬は東面招討沢潞使となり、さらに王茂元・劉沔とが劉稹を討ったとみえる。起句は、王元逵・何弘敬が招討となったことを言っている。承句は、劉沔が昔、振武牙将となり、今、河東節度使となって、いっしょに劉稹を討つことを言っている。転句結句は、平和な時には武臣は文人を重んじないが、このときになって、軍中の文書が頻繁にやりとりされ、盾を磨き、檄文を書くのに、一介の書記の手さえも借りるのは、喜ばしいことであると言っている。ときに、李義山は王茂元の軍中にあって、以前王茂元に代わって、劉稹への檄文を書いたことが

あった。李義山はすでに王茂元の気に入りの婿になっていたのであるから、「軽薄」ということばは、決して王茂元を指しているのではない。あるいは当時、軍中に李義山を軽視する人がいたので、そう言ったにすぎないであろう。

『重訂李義山詩箋注』巻中程夢星按語

第二は、とくに具体的な事柄には結びつけない解釈である。姚培謙は次のように言う。

自藩鎮驕恣。士多屈節於幕府。而李杜之標格。不可問矣。無気骨。焉得有文章。

藩鎮が驕恣になってから、官吏で幕府に節を屈して仕える者が多くなった。李白・杜甫のような品格などを望むべくもない。気骨がなくて、どうして文学を創造できようか。

『李義山詩集』巻十六

また、屈復は次のように言う。

四首言銜節建台。内外皆軽薄之人。焉得不敗。且喜者。不尽之詞。及臨戎而方用草萊。恐其晩也。

第四首は、使節を受けるのも、行台を建てるのも、内外ともに軽薄の人で、どうして負けないでいられようと言っている。「且つ喜ぶ」とは、尽きせぬ深意を含んだことばである。いざ戦争になって、やっと民間の人を用いても、おそらくもうおそいであろう。

『玉溪生詩意』巻七

第三は、石雄という武将のことに結びつける解釈で、馮浩は次のように言う。

四章代北二句。専為石雄発。以見李衛公之善任人也。旧新書及通鑑曰。雄徐州人。系寒。不知其先所来。曾為壁州刺史。以王智興誣奏。長流白州。太和中党項寇河西。選求武士。乃召還。隷振武軍使劉沔為裨将。会昌初回鶻烏介

可汗奉太和公主犯雲朔北川。詔移沔河東節度。沔以太原之師屯雲州。雄受沔之教。自選勁騎三千。月暗発馬邑。直犯烏介牙。追撃之。遂迎公主還。正代北之地。故曰代北偏師也。河東道諸州皆関東也。雄起自偏裨。以功授天徳防禦副使。遷河中尹晋絳行営節度。則建行台矣。振武軍在単于東都護府。天徳軍在豊州中受降城西之大同川。皆関内道之辺。与河東道之辺犄角以禦北狄。雄之立功。実在関東。旧本皆作東。朱氏作中。誤也。潞之役。雄功最多。二句蓋統指破回紇平昭義之事。其後又移河陽鳳翔両鎮。而王宰者。智興之子。数沮陷之。会徳裕罷相。因代帰。雄自陳黒山烏嶺之功。求一鎮以終老。執政以徳裕所薦。僅除龍武統軍。失勢怏怏。聞徳裕貶。発疾而卒。雄本系寒。又召自流所。党人既排擯於徳裕罷相之後。必早軽薄於徳裕委任之時。故曰不妨常日饒軽薄。且喜臨戎用草莱也。其時名将。劉石並称。然沔不可云草莱。且義而有勇。罕有雄之比者。故武宗李相於諸将中最賞識者惟雄也。雄為党人排擯。義山受党人之累。故特為之鳴不平。而致慨於衛国也。

第四首の「代北」二句は、もっぱら石雄のために言っていて、李衛公（徳裕）が人を用いるのが上手であることを表わしている。旧・新『唐書』および『資治通鑑』に「石雄は徐州の人で、寒門の出身で、その祖先についてはわからない。以前、壁州刺史となり、王智興の誣奏によって、長い間白州に流されていた。太和中、党項（タンクート）が河西に侵入し、武士を選んだとき、召還され、振武軍使劉沔にしたがって裨将となった。会昌の初め、回鶻（ウイグル）の烏介可汗が太和公主を奉じて、雲州・朔州の北方の川を侵犯したので、詔して劉沔を河東節度に移し、沔は太原の軍隊を雲州に駐屯させた。石雄は沔の教えを受け、自分で強い騎馬を三千選び、月が暗いときに馬邑を出発し、そのまま烏介（可汗）の本陣を襲って、追撃し、とうとう（太和）公主を迎えて還った。」と言う。ちょうど代北の地であるので、「代北の偏師」と言っているのである。河東道諸州はみな関東である。石雄が偏師や裨将から身を起こし、その功によっ

て天徳防禦副使を授かり、河中尹晋絳行営節度に遷ったことは、つまり行台を建てたということである。振武軍は単于東都護府にあり、天徳軍は豊州の中受降城の西の大同川にあり、いずれも関内道の辺境であり、河東道の辺境とともに、牛の角のように北方異民族から守っている。石雄が功を立てたのは、まさに関東においてであり、旧本はみな「東」に作っていて、朱鶴齢が「中」に作るのは誤りである。潞の役（劉稹の反乱）では、石雄の功が最も大きかった。（前）二句は、思うに、回紇を破ったことと昭義軍を平定したこととをまとめて指しているのであろう。その後さらに河陽・鳳翔両鎮に移った。しかし、王宰という智興の子が、しばしば石雄の官途の邪魔をした。李徳裕が宰相を罷めると、そのために人事が交替し、石雄は自分で黒山・烏嶺の功を申し上げて、一鎮を求めて晩年を過ごした。（実際の武官としての）官職の方は李徳裕の推挙によって、やっと龍武統軍に除せられ、勢力を失って心楽しまず、李徳裕が左遷されたと聞いて、病気になって死んだ。石雄はもともと寒門の出身で、そのうえ流謫地から召されたので、李徳裕が宰相を罷めた後、党人に排斥されたからには、きっと李徳裕が宰相在任中にもすでに軽んぜられていたにちがいない。それゆえ「妨げず常日軽薄せらるること饒きを、且つ喜ぶ戎に臨みて草莱用いらるるを」と言うのである。そのときの名将は、劉（沔）・石（雄）と並称されるが、劉沔は「草莱」とは言えず、そのうえ、忠義心があり、勇敢なことにおいて、めったに石雄にならぶ者はいない。それゆえ武宗・宰相李徳裕が、多くの武将の中で、最もその実力を認めていたのは石雄だけだった。石雄は党人に排斥され、李義山も党人の累害を受けたので、とくに石雄のために不平を鳴らし、そして李衛国公（の左遷されたこと）を嘆いているのである。

『玉溪生詩詳註』巻二

張采田もほぼ馮浩は、同じ考えであるが、ただ馮浩の詩の承句に「軽薄」というのは、石雄が党人に軽んぜられたこ

と解釈しているのに対し、張采田は、李商隠がかつて李徳裕を軽んじていたと解釈している点が異なる。

馮浩は、承句の「関東」について、旧本はみな「関東」となっていて、朱鶴齢箋注本が「関中」としているのは誤りであると述べている。この「東」か「中」かは少なからず解釈に関わるが、今日において善本とみなしうる『唐詩百名家全集』本及び銭謙益写校本ともに「東」に作るので、それに拠ることにする。[4] そのうえ、起承句は対句ゆえ、「代北」に対して「関東」の方がより対句として緊密でもある。

以上、三方向の解釈の中で、最も実際の事と符合しているのは、馮浩・張采田の考えであろう。石雄の事跡が、李商隠の詩にいう地名・官職等と符合していて、一見、何の問題もなさそうである。しかし、こうまで具体的なことを、李商隠は詠じたかったのであろうか。そのうえ石雄や李徳裕の偉大さを詠ずるにしては表現が迂遠すぎはしないだろうか。いくつもの解釈を生ずるほどに遠回しに人を誉めるのであろうか。筆者は馮浩・張采田の解釈に同意しかねるのである。「代北」の地は、北方辺境の代表的なところであるし、「関東」は、函谷関以東の地をいうので、きわめて広い範囲を指すことになり、特定の人物の事跡に結びつけるのは不適当ではないだろうか。むしろ、意識的に非具体的に表現されているように感じる。この詩は、ある人物を誉めたのではなく、むしろ、あることに対する批判なのではないだろうか。しかも、公然とはできないたぐいの批判ではなかろうか。もしそうであれば、その表現は遠回しになり、読み手に様々な解釈をゆるすことになる。というわけで、筆者は第二の解釈、姚培謙・屈復の考えに同意したい。

第四首は、代北などの辺境を守る兵は少なく手薄なのに中央から命を受け、関東にあたる藩鎮は中央を無視して自治独立の状態であり、中央当局は、普段、藩鎮から軽んぜられてもそれに甘んじており、いざ辺境で戦争となると、まるで喜んで民草を徴兵するかのような按配である、といっているように思われる。

其五

郭令素心非黷武　郭令　素心　武を黷（けが）すに非ず
韓公本意在和戎　韓公　本意　戎と和するに在り
両都耆旧偏垂涙　両都の耆旧　偏えに涙を垂る
臨老中原見朔風　老いに臨んで中原　朔風を見る

第五首も、文学とは関係のない内容である。やはり諸評注さまざまに解釈が分かれているが、大きくは二つの方向に分けられる。

第一は、姚培謙の考えで、安史の乱に結びつける解釈である。

中原喪乱。豈料自李杜以来。直至今日哉。士之能卓然自立者鮮矣。

中原の喪乱が、李（白）・杜（甫）のころからずっと、そのまま今日まで続いていようとは思いもよらなかった。士大夫で（喪乱の中にあっても）すぐれて抜きんでて自分の立場を貫きとおせる人は少ない。

『李義山詩集』巻十六

屈復はとくに具体的な事に結びつけてはいないが、郭子儀のことと韓公すなわち張仁愿のこととをそのまま受け取れば、やはり安史の乱を想定していることになろう。

五首言。有郭韓之英雄而不用。所以両都垂涙而中原朔風也。

第五首は、郭子儀や韓国公（すなわち張仁愿）のような英雄がいても登用しないので、長安・洛陽（の年寄りたち）が涙を流し、中原に北風が吹くように、安史の乱で陥落の憂き目を見たのであると言っている。

第二は、李徳裕の事跡に結びつける解釈である。朱彝尊が引く楊守智の考えは、ただ李徳裕を誉め、反対党の令狐綯の非を言うとするだけで、とくに具体的な事件には触れないが、程夢星は、会昌のはじめ、回紇が唐の領土内に南下してきたとき、李徳裕が、回紇（ウイグル）は安史の乱の際、唐を救うのに協力した功があるのだから、今攻めるべきではないと主張したことに結びつけ、李商隠は、この詩を作ったとき弘農の尉であったと述べている。[5] 馮浩は、大中三年、河湟すなわち秦州・原州・安楽州が吐蕃（チベット）から唐の領土に復したことに結びつけ、その功労者である李徳裕がすでに配所に没していることを悼んで、李商隠のこの詩ができたと述べる。張采田は、李徳裕が剣南西川節度使だったとき、当時、吐蕃の領土だった維州の悉怛謀が、唐に帰順しようとし、李徳裕はそれを受け入れたが、牛僧孺が反対し、悉怛謀らを吐蕃に帰したため、彼らはむごい刑に処せられた。このとき李徳裕の意見をきいていれば、後、吐蕃から河湟を取りもどすのに、そんなに時間はかからなかったであろうに、と李商隠はこの詩で、李徳裕のために弁明していると解釈している。何焯は、朱鶴齢本に載せる評に、やはり李徳裕と結びつけて、この詩を解釈しているが、鮮于仲徳なる人物が南を征討したとき、敗れた兵が、李徳裕のおかげでやっと帰れ、李徳裕には功績があり、過失はないと述べる。鮮于仲徳については不明で、李徳裕の本伝にも手がかりを得ない。

論点は二つに絞られる。寄託を認めるかどうか、そして、後半二句の解釈として、長老たちが悲しんで泣いたのか、それとも喜んで泣いたのかである。この詩に寄託を認めないとすれば、郭子儀や張仁愿のころのことをうたっているのであるから、当然、安史の乱に関わるので、「両都」すなわち洛陽も長安も賊中に落ち、長老たちが、開元・天宝と久し

く平和に過ごしてきたのに、年とってから戦争になり、中原が賊軍に荒らされたことを悲しんで泣いたことになる。張仁愿は則天武后のころから開元のはじめにかけての武将で、三受降城を築いて、突厥の侵入を防いだ功績があるが、郭子儀がちょうど安史の乱の際に活躍したことと比べると時代がずれる。しかし、玄宗朝の長い平和をもたらすのに貢献した武将と考えられよう。

馮浩や張采田は、李徳裕の功をたたえた詩と考えているので、寄託を認めていることになり、李徳裕亡きあと、大中三年になって、やっと河湟の地がまた唐のものとなり、そこで遺民となっていた人たちが、宮城に参じ、天子が慰撫して、漢の衣服に改めさせるため冠帯を賜わり、皆感激して泣いたということになる。しかし、問題なのは、実際、「両都」のうちの洛陽が関係ないこととなってしまうことと、河湟の地に結びつく表現が詩の中にはないということであろう。第五首も、第四首と同様、寄託があるとして、具体的なことに結びつけて考えようとすると、やはり無理が生ずるようである。

それでは、第五首をどのように解釈すればよいのであろか。第四首とともに、非常にわかりにくい詩であるが、〝文〟より〝武〟であると言った李商隠が、第四首・第五首において、〝武〟をも問題なしとしないと言っているのではないだろうか。第四首で、わかりにくい政治批判らしきことを示唆し、第五首で、たとえ立派な武将がいても、安禄山のようなやからを抬頭させては、平和を謳歌していた中原の地も、戦禍に見舞われてしまうのだ。〝武〟だけで政治を行なうことは無理なのであると言っているように思われる。

以上、「漫成五章」は、すべてが文学についての詩ではない。それでは杜甫の〝論詩絶句〟とは無関係なのかというと、筆者は無関係ではないと思う。寄託の問題についていえば、杜甫の「戯れに六絶句を為る」にも寄託を認めようとする

論家はいる。また、杜甫の詩の中にも、「解悶十二首」などのように、すべてが文学についての詩ではないものもあるのである。李商隠が杜甫と関わりなく「漫成五章」を作ったとはいえまい。

(二)

次に、「漫成三首」について考えよう。これらの詩は、「漫成五章」とはちがって、それぞれの詩の結びつきが強く、三首で総合的に考えたほうがよいので、はじめに三首すべてを掲げよう。

其一

不妨何范尽詩家　妨げず何范　尽く詩家たるを
未解当年重物華　未だ解せず当年　物華を重んずるを
遠把龍山千里雪　遠く龍山千里の雪を把(と)って
将来擬並洛陽花　将(も)ち来たって洛陽の花に並べんと擬す

其二

沈約憐何遜　沈約　何遜を憐れみ
延年毀謝荘　延年　謝荘を毀る
清新俱有得　清新　倶に得る有り
名誉底相傷　名誉底ぞ相傷つけん

其三

霧夕詠芙蕖　霧夕　芙蕖を詠じ
何郎得意初　何郎　得意の初め
此時誰最賞　此の時　誰か最も賞せん
沈范両尚書　沈范　両尚書

三首とも六朝梁の何遜に関わる詩である。第二首、第三首は五言絶句で、いわゆる〝論詩絶句〟の七言絶句という詩形の枠を出ていることになる。しかし、第三首に、何遜のことを沈約・范雲ふたりが誉めたということは、杜甫が「解悶十二首」第四首に、友人の薛璩を懐って、「沈范　早に知る何水部、曹劉　待たず薛郎中」と詠じていることと関わるように思われる。詩形はともかく、杜甫のこの詩が李商隠の念頭にあった可能性は否定できない。

諸評注の中にも、杜甫の影響を言うものがあることは、すでに述べたとおりである。また、これらの詩に寄託を認めるかどうか、という点についてみると、かなり多くの評注が寄託があると主張している。例えば馮浩は次のように述べる。

浩曰。此開成三年初婚王氏而応鴻博時作也。末首上二句借謂初婚。下二句謂周李両学士挙之也。詳文集。次章首句指愛我者。次句指忌我者而言。皆属文人。何為争名相忌。蓋時在不中選之前。雖已遭忌。尚未大甚。故語猶婉約。三首皆以何遜自比。首言范不如何。三言沈范同賞。蓋所重不在范。不妨錯言之。

馮浩が言う。これらの詩は開成三年、王氏と結婚したばかりで、博学鴻（宏）詞科の試験を受けたときの作である。第三首の前半二句は（何遜のことに）かこつけて、自分が結婚したばかりであることを言い、後半二句は、周（墀）、李（回）のふたりの学士が李商隠を取り立てようとしたことを言っている。『（樊南）文集』に詳しい。[6] 第二首の起

句は、自分を可愛がる人を指し、承句は自分を嫌う人を指して言う。みな文人のはしくれなのに、どうして名声を争い、互いに憎み合うのだろうか。思うに、これらの詩を作ったときは、試験に落第する前で、すでに嫌われたりしていたものの、まださほどひどくはなかったので、詩のことばはまだものやわらかな言い方であったのだろう。三首はみな何遜を自分にたとえている。第一首は范雲は何遜に及ばないと言い、第三首は沈約・范雲がどちらも誉めるという。思うに、范雲を重じているわけではないから、「不妨」というのは、（何遜に范雲も）混ぜて言ったのだろう。

『玉溪生詩詳註』巻一

馮浩は、李商隠が自分のことを何遜になぞらえていると述べる。他に、朱彝尊、何焯、程夢星、紀昀、張采田も寄託があると主張している。

寄託のあるなしを考える前に、まず、詩の内容をみてみよう。第一首は、何遜と范雲がやりとりした聯句「范広州宅聯句」に、「洛陽城の東西、却って作す経年の別れ。昔　去りしとき雪　花の如く、今　来たれば花　雪の似し。」（范雲）とあるのを踏まえている。この詩の主体を今の詩人たち、すなわち、李商隠と同時の詩人たちに置くと、今の詩人たちは、何遜も范雲もどちらも立派な詩人だと認めるのにやぶさかでないものの、当時、この二人の詩人がいかに自然の美を重んじていたかはわかっていないようだ。千里も離れた龍山の雪を洛陽の花と並べようとした、その自然の美を深く愛したゆえの表現の素晴らしさをわかってはいないのであると解釈できる。(7) もう一つの可能性は、主体を李商隠自身に置く解釈であろう。そうすると、いささか諧謔を含むことになる。何遜も范雲もどちらも立派な詩人だとは思うけれど、当時、二人が自然の美を重んじていたとは受けとめかねる。遠く千里も離れた龍山の雪と洛陽の花とを並べようとした

りするのだから。

どちらに解釈するにしても、この詩はやや遊戯的な面があるように思われる。そして、第二首、第三首も同様の感じがする。

第二首は、沈約が何遜の詩を愛し、「吾れ卿の詩を読み、一日三復し、猶お已む能わず。」と言ったこと（『梁書』巻四十九何遜伝）と、六朝宋の孝武帝が顔延之に、謝荘の「月賦」はどうだと問うたとき、顔延之は、「美なるは則ち美なり矣。但だ荘　始めて『千里を隔てて明月を共にする』を知るならん」と答え、孝武帝がそれを謝荘に話すと、謝荘は「延之『秋胡の詩』を作り、始めて『生きては久しく離別を為し、没しては長く帰らざるを為す』と知るならん」とやりかえしたという話（『南史』巻二十謝荘伝）とを踏まえている。李商隠は、詩人の中に、沈約のように何遜を可愛がる人もいれば、顔延之のように謝荘をけなす人もいる。いずれの詩人の作も清新で、取り柄があるのに、どうして互いに名声を傷つけ合うのだろうと、正反対の詩人たちを比べている。第一首の雪と花の対比、第二首の誉めるのとけなすのと、両極端の組み合わせを楽しんでいるようである。

第三首は、何遜の「伏郎の新たに婚するを看る詩」に「霧夕　蓮　水より出で、霞朝　日　梁を照らす。何如ぞ花燭の夜、軽扇　紅粧を掩う。」と詠じているのを踏まえている。霧がかかった夕暮れに、蓮の花（恋と通じる）を詠じ（恋がかなって）、何遜は妻をもらったばかり。このときだれが一番ほめただろう。沈約と范雲のふたりの尚書であると解釈できよう。范雲も何遜を推賞したことは、やはり『梁書』巻四十九何遜伝に見える。第三首は、第一首、第二首と合わせて、しめくくりとなっている。

第三首の構成からみて、かなり意識的に組織され、三首が総合されて、おもしろさが表現されているようである。何

らかの寄託がかりにあったとしても、馮浩らが主張するようなことであったかどうかわからない。その遊戯的なところからみて、案外、楽屋落ちになっているのかもしれない。李商隠が自分を何遜にたとえているのかどうか、これも断定はできないだろう。李商隠の「韓冬郎　即席に詩を為り相送る。一座　尽く驚く。他日　余方に『連宵　坐に侍り　徘徊すること久し』の句を追吟するに老成の風有り。因って二絶を成し、寄酬し、兼ねて畏之員外に呈す」と題する詩の第二首に「剣栈　風檣　各々苦辛し、別れし時は氷雪　到る時は春。何遜に憑って聯句を休むるが為に、瘦せ尽す東陽姓は沈の人。」と詠じていて、李商隠は自分を沈約に、韓偓を何遜にたとえている。何遜にたとえられる人は若くなければならない。李商隠自身が最も好んで自分のことをたとえるのは、司馬相如である。例えば「令狐八拾遺綯招かれて、裴十四の華州に帰るを送る」詩に「嗟　余　久しく臨邛の渇を抱く、便ち君に因って釣磯を問わんと欲す」と詠じ、また、「成都の高苗二従事に寄す」[9]詩に「紅蓮　幕下　紫梨　新たなり、命は断つ　湘南　病渇の人」と詠じ、さらに「令狐郎中に寄す」詩にも「問うを休めよ梁園の旧賓客、茂陵の秋雨　病相如」と詠じている。

必ずしも、寄託ありと考えなくても、これらの三首は充分機知に富んだ作品になっているので、寄託がなければおかしいと思われる詩ではないと思う。詩人の組み合わせのきっかけは、杜甫に影響を受けているようである。

「漫成」詩二組について、考えたところを述べてきたが、いわゆる〝論詩絶句〟の枠で考えると、収まりきらないことがわかった。後世の戴復古・元好問らの出現によって、〝論詩絶句〟の枠は確立された。しかし、杜甫の〝論詩絶句〟は、後世のそれよりいささか広がりをもっていたように思う。李商隠は、杜甫のそういうやり方に自然と影響されていたように思われる。そのうえで、李商隠独自の視点、発想を展開しているといえよう。すなわち、〝論詩絶句〟の典型化

は、戴復古・元好問の時代まで下らなければならないが、杜甫の切り開いた絶句の一つの可能性は、李商隠の注意を引いていたと考えられる。李商隠は、杜甫の新しさを吸収しつつ、独自の詩作を行なっていったといえるだろう。

注

(1) 例えば周益忠「論詩絶句発展之研究」国立台湾師範大学国文研究所集刊二七　一九八三年六月

(2) 京都大学人文科学研究所蔵　光緒中常熟宗氏刊民国六年徐兆瑋印本「宗月鋤先生遺箸(ママ)八種」所収に拠る。

(3) とくに杜甫の後世における評価については、黒川洋一『杜甫の研究』(一九七七年十二月)第四章「杜詩の発見」に詳しく論究されている。

(4) 李商隠の詩集の考証については、荒井健「李義山詩集小考――よくは分からぬ宋版のこと――」(『東方学報』第五十二冊　一九八〇年三月)に詳しく論究されている。

(5) 「漫成五章」がいつ作られたかは、寄託する内容によって決まる。程夢星は、李商隠が弘農の尉だったときの作というが、その年譜には開成四年(八三九)に弘農の尉だったと見えるので、まだ回鶻の乱は起っていないことになり、矛盾が生じている。馮浩によれば、大中三年(八四九)の河湟収復よりのちの作ということになる。張采田は大中三年の作とする。いずれにしても、寄託するところが諸家が考えているとおりかどうかわからないので、それによる繫年はあまり意味がない。

(6) 『樊南文集』巻八「陶進士に与うる書」に、「前年乃ち吏部上の中書と為り、帰って自ら驚き笑い、又た復び懐恨す。周李二学士大徳を以て我に加え、夫れ所謂博学宏詞は、豈に容易ならん哉。…(前年乃為吏部上之中書。帰自驚笑。又復懐恨。周李二学士以大徳加我。夫所謂博学宏詞者。豈容易哉。…)」と見える。

(7) 「漫成三首」の第一首には、すでに詳しい注釈がある。『東方学報』第五十一冊(一九七九年三月)「李義山七絶集釈稿(二)」に収められ、筆者の第一の訳はこれに拠る。

(8) 『唐詩百名家全集』本は「徐」に作るが、これは「余」の方が適当だと思われる。

(9) 『東方学報』第五十冊(一九七八年三月)「李義山詩各本篇目対照表」による作品番号は二九〇である。作品番号九四は同題で別の詩である。